

デュルケム社会学を社会思想として捉えなおす —デュルケム道德社会学は何を目指したか—

景井 充ⁱ

本稿は、デュルケム社会学を社会思想として捉えなおすことを目指す筆者の研究活動を報告する、第一弾の論考である。デュルケムの社会学は、実証主義社会学を新たな一独立科学として創設するという課題と、「社会の道德的再建」を世俗的かつ合理的に果たして19世紀フランス社会を覆う不安定な社会情勢を克服するという課題と、これら二つの容易ならざる課題を同時に達成することを追求していた。そして、これら二つの課題に同時に応える任を担うはずであったのが「道德社会学」であり、幻の大著『道德』であった。本稿において、「社会的事実」の生成過程を把握する〈発生論的構成〉こそが、デュルケム実証主義社会学の理論的整備に大きく貢献し、立体的に「社会的事実」を把握する観点をもたらすとともに、実証主義社会学の社会思想的ミッションを遂行させて時代的要請に応えることを可能にするものであることを明らかにして、「道德社会学」再構成の取り組みを開始する。

キーワード：道德、道德への序、道德の科学、集合生活、社会思想、実証主義社会学

目次

1. 「道德への序」
2. デュルケム道德社会学の問題圏
 - (1) 残された課題——「道德」の生成過程の解明
 - (2) 実証主義社会学の社会思想的課題
3. 社会思想としてのデュルケム道德社会学

1. 「道德への序」

E・デュルケムが存命中に自ら世に問うた著作は、1893年に博士学位を取得した『社会分業論』、1895年の『社会学的方法の規準』、1897年の『自殺論』、これら1890年代たて続けに発刊された3著作と、実に15年の歳月を隔てて1912年に発刊され遺作となった『宗教生活の原初形態』（以下『原初形態』）、以上

の4作品ですべてであった。もとより、論文や書評の数はかなりの本数にのぼる。精力的な研究活動を反映して書評を多数書き遺しているのもデュルケムの特徴といえるだろうし、重要な論文も少なくない。しかし、まとまった著作としては、上記の4冊ですべてである。これらの業績がいまや社会学という学問にとって礎となり共有財産となって、いわゆる“古典”としての地位を確固として占めていることは、繰り返すまでもない。

だがもうひとつ、これもまた必ずや社会学における第一級の古典の地位を占めたであろう著作への意欲と構想を、第一次大戦の最中、死が近づきつつある中でデュルケムが抱いていたことは、存外ほとんど知られていない。1858年生まれのデュルケムにとって、没年となった1917年（59歳）の時点で構想を練っていた全3巻の著作は、そのスケールの大きさだけから考えても、おそらく生涯最後の著作となる

i 立命館大学産業社会学部准教授

だけでなく、長年にわたる学究生活のすべてを結晶させる浩瀚な大著となったはずである。手稿のまま残された「序文」によれば、その著作の主題は、「道德 la morale」とはいかなる社会的現象なのかというものであった。このことは、デュルケムが、自身の学説全体をある意味で“背後仮説”¹⁾として支えてきた「道德」なるものをいよいよ反省的に問題化し、その実質を明らかにする姿勢を示したということに他ならない。しかし彼は、わずかにこの著作の序論だけを書き遺し、逝った。惜しまれること、この上ない。我々の手には、「道德への序 Introduction à la morale」と題された文章だけが、絶筆となって遺されたに過ぎない。

未完どころかわずかに序文が、しかも手稿の形で遺されていたに過ぎないこの著作の構想に、筆者はとりわけ強い関心を寄せるものである。その第一の理由は、上述のように、「道德」なるものこそが、デュルケム社会学の“背後仮説”として学説全体を基礎付け、したがってそれを決定的に特徴づけているにも拘らず、まさに“背後仮説”であるがゆえに反省的に問題化されることがなかったことにある。実際、『社会分業論』あるいはそれ以前から、「道德」を“社会の魂”といい、また社会統合の核だと説きながら、ではそもそも「道德」なる現象は本質的にいかなる内容を持ち、いかなる性格を備えているのかといった諸々の疑問に対して、デュルケムは一度も自己言及的な検討を行なったことがない。デュルケムの学説全体の中で、「道德」なるものが“地軸”とも言うべき位置にあることは、デュルケムの著作を少し立ち入って読めば、誰でもただちに感得するであろう。にもかかわらず、デュルケムのいう「道德」とは詰まるところいかなる社会的現象なのか、社会をひとつの「道德」現象と把握するということは要するにどういうことなのかといった根本的な問題に対して、デュルケム自身によって明瞭な説明がなされたことは、実は一度もない。我々がデュルケムの著作を丁寧に読み、分析し、そこに盛り込まれた思想内容や理論構造を細大漏らさず汲み取ろうと

努力すればするほど感じられてならない独特のもどかしさや困惑、そして不充足感は、結局ここに起因しているものである。

デュルケムにとって「道德」は、自らの社会学的認識における自明の前提であり、価値的志向に色濃く彩られた世界観でもあったと言ってよい。実際、デュルケムの「道德」観はその学説全体を大きく規定している。だが、我々にとってデュルケム流の「道德」は、無批判に共有すべき自明の前提でもなく、盲目的に従属すべき不可侵の絶対的価値でもない。誤解を恐れずに言えば、その学問的意義をめぐって批判的検証に付されるべき、デュルケム社会学理論の一構成要素に過ぎない。とはいえ同時にそれが、徹底的な理解を獲得することでデュルケム社会学理論全体への包括的な展望が得られるような、また社会学に対する学術的貢献を為し得るような、決定的な位置を占める構成要素であることもまた、言うまでもない。「道德」は、デュルケムの社会学説を研究するに際して、主題群のひとつに過ぎないどころか、起点であり終点であるべき最重要の主題である。そうした関心から、この著作に関心を抱かざるを得ないのである。

しかし、この著作計画は、彼の死によって永遠に霧消してしまった。この著作に盛り込まれたであろう研究の内容とその水準はさぞや深く高いものであったろうことを思うとき、デュルケムの社会学説の理解にそれがどれほど役立ち、また社会学研究にとってどれほど意義ある主題群を後世に遺したであろうかと考えるとき、さらには現実の社会的諸問題への理論的・実践的アプローチにも何らかの形で貢献したであろうことを思うとき、まことに残念というより他ない。とはいえ、前述の通り、「道德への序」と題された文章が辛うじて遺されている。マルセル・モースが、この手稿の持つ重要な学問的意義に鑑み、多少手を加えて整理しながらも、1920年、ほぼそのままの形で発表してくれたからである。

さて、もとより全文をここで紹介することはできないので、そのごく一部を引いてみよう。デュルケ

ムはこの序文において、構想中のこの著作で企図するものを、「道徳の科学ないし道徳的諸事実の科学 la science de la morale ou science des faits moraux」の創造とし、それぞれの巻で採り上げる課題の概略を次のように整理している。

1. 道徳的諸事実を研究するためには、それがどこに位置しているのか、すなわち現実のいかなる次元にそれらが帰属しているのかということを知らねばならない。それらは明らかに意識の現象である。しかしそれは個々の意識の現象であろうか、集合的な意識の現象であろうか。そしてもしその諸現象が両方の次元に属するものであるなら、何がそれらの役割と機能であろうか。（第1巻）
2. 明らかにしようとしてきたようにそれらが本質的に社会的なものであるなら、さらにはそれらを科学的研究にとって興味あるものとするものがまさにその社会的なあり方であるならば、他の社会的諸事実の中でそれらをどのような指標によって見分けるのであろうか。（第2巻）
3. 集合生活の全体の中でのその位置付けはいかなるものであろうか。（第3巻）
4. 最後に、ひとたびそれらが位置付けられ、領域を限定され、特徴づけられ、最も直接に関わりあう諸現象と関係づけられたならば、探求すべきは、いかにして、どのような方法にしたがって科学はそれらを取り扱うべきか、またこうした科学的・理論的研究から実践的な結論をいかにして引き出しうるかということである。
[Text2 p.331]

「道徳的諸事実」をめぐるこれら研究課題の設定において、課題1と3、課題2と4はそれぞれ重なり合うところのあるものである。

課題1の前半は、「道徳」現象が人間の意識空間——個人的・集合的双方——の次元に存在する現象であることを確認するための課題提起である。『社

会学的方法の規準』（1895）や「個人表象と集合表象」（1898）から「人間性の二元性とその社会的諸条件」（1914）に至るまで論及され続けた、デュルケム流の“個人と社会”問題についての総括的検討が行われていたのであろうか。あるいは、デュルケムが提示した人間性に関する二元性論は深刻な理論的難点を抱えているから、デュルケム自身によって修正が試みられていたかもしれない。そうであればなおさら素晴らしい。

課題1の後半と課題3とは、集合生活全体の中での、社会的・集合的な現実全体に対するその機能的意義を解明することを目指すものである。『社会分業論』での進化論的な社会発展をめぐる重要な検討課題——分業の進展する組織的社会的道徳的社会統合はいかにして可能か？——を想起させる。あるいはまた、社会的領域として膨張し続ける経済領域との関係や、さらには「アノミー」論にも関わってくるだろう。『宗教生活の原初形態』の聖俗論を例にとれば、集合生活全体の中での「聖」の内容と位置そして機能、また「俗」への関係性を明らかにしようとする課題設定であると言えるわけだが、ここでは、『宗教生活の原初形態』で獲得した社会学的認識を踏まえ、聖俗理論をも含む、より包括的な「道徳」現象についての原理的考察が展開されたのではあるまいか。

課題2と課題4の前半部とは、方法論的・認識論的な関心にもとづく課題設定であり、『社会学的方法の規準』で繰り広げた実証主義社会学の方法論的考察をさらに展開するチャンスとなっていたのではあるまいか。実際、デュルケムの実証主義的方法是『社会学的方法の規準』からさらに洗練する必要があったにもかかわらず、その機会は設けられていなかった。実際ここでは、実証主義的客観主義を根底から転換したとは考えにくいものの、実証主義的認識の限界を超える新たな認識方法の検討がなされていたかもしれない。

最後に、課題4の最後の部分は、実証主義的 sociology の特質の一つであるその実践的性格に言及してい

るものであって、眼前の社会的現実へ対応するための、処方箋的というよりは原理的な認識と介入を可能とするための知見を導き出そうとする課題意識が顔をのぞかせている。「個人主義と知識人」(1898)で示した具体的な歴史・社会的事件(ドレフュス事件)への思想的・原理的応答や、最晩年の論文「価値判断と現実判断」(1911)で論及したような、「道徳的世論の科学 la science de l'opinion morale」[1911:80/1985:85] = 「習俗の科学 la science des mœurs」[1911:80/1985:85]の社会的現実に対する介入のあり方に関する考察をより一般化し、当時のフランスの歴史的・社会的状況を見据えながら、「道徳的諸事実」への社会学独特の関与や介入のあり方が詳細に論じられていたかもしれない。

こうした問題群への取り組みが、ただ既存のものの再論と整理に終わることはなかったであろうと思うとき、『道徳』と銘打つ著作が構想されていたという事実、強く惹きつけられざるを得ないわけである。最晩年に構想されていたこの畢生の大著こそ、デュルケムの“背後仮説”であり続けた「道徳」の何たるかが明らかにされる機会となるはずであったし、そうでなければならなかった。デュルケム社会学における「道徳」とは何か、この根本的な前提的問題に正面から取り組み、これにデュルケムなりの回答を提示すべき機会だったはずなのだ。それは、一筋縄では把握することのできないデュルケム社会学の構想全体を判然とさせると同時に、より一層豊饒化する機会となったはずなのである。

2. デュルケム道徳社会学の問題圏

(1) 残された課題——「道徳」の生成過程の解明

筆者がこの幻の大著に強い関心を寄せる理由の第2は、「道徳」がデュルケムにとっての“背後仮説”であったがゆえに、デュルケムがその道徳社会学を創出するに際して整備すべき重要な理論領域を、内容豊かな形で構築することができなかったと考えているからである。幻の大著『道徳』は、その未成熟

な理論領域への本格的な着手を果たし、その理論的意義に相応しい位置づけを試みるべき最後のチャンスとなるべきであった。

デュルケムの社会学説に関する研究活動の中で最も頻繁に検討課題として取り上げられてきたのは「集合意識」と言ってもよいと思われるが、デュルケムが描き出そうとした社会像の、したがってその社会学説の中心にあるのは、むしろ「集団」であり「集合生活」である。しかも、私利利害関心を離れた、『原初形態』に即して言えば「聖なるもの」を産み出す「集団」であり「集合生活」である。“外部から内部へ”という認識上の手順を尊重しながら不断に発展し続けたデュルケムの社会学研究を丁寧に通覧してみると、その研究活動を一貫して導き続けた主導的発想——これも背後仮説——を感じ取ることができる。最も抽象的にそれを表現すれば、『人間の秩序ある集合生活は、その集合生活それ自身が産み出す何らかの〈超越的なもの〉との関わりの中でのみ可能である』という深い確信であったと言える。ここから、デュルケムの学的営為は、「社会的現実としての〈超越的なもの〉とは何か」、「それはいかにして「集団」から産出されるのか」「それはいかなる機能的意義を持つか」「それはいかなる方法によって把握できるのか」、「それが消失するときいかなる危機的事態が現出するか」、「そうした危機的事態を収束させるためにいかなる手段を講じるべきなのか」といった一連の問題群への応答を積み上げていくものとなる。

デュルケムのいう「道徳」とはまず、集合生活に参加している当該集団の成員と何らかの〈超越的なもの〉との間に形作られる一定の相互賦活的関係を指している。『道徳教育』(1925)の中で取り上げられている道徳性の三要素——「規律の精神」「社会集団への愛着」「意志の自律性」——は、人を道徳的に行為させる心的駆動力をただ単に列挙したものではなく、何らかの〈超越的なもの〉との循環的な賦活関係を産み出す心的力動を抽出したものとして理解されねばならない。デュルケムの考えでは、これ

ら道德性の諸要素は、人が「集団」＝「集合生活」の中にあるときにのみ作動する。つまり、デュルケムの考えている「道德」は、何らかの〈超越的なもの〉を産み出し、これを精神的拘束力を有するものとして賦活する「集団」の、その発生論的な存在特性なのである。

我々はそうした問題群への挑戦の軌跡を、彼の著作に即して辿ることができる。「〈超越的なもの〉とは何か」という問題意識については、『社会分業論』において、かの「集合意識」論、「機械的連帯」および「有機的連帯」という二つの社会的（道德的）連帯の類型とその変遷をめぐる導入的な試論の中に、その基本的イメージを見ることができる。その基本的イメージは、『社会学的方法の規準』での「社会的事実」をめぐる考察に引き継がれ、やがて『宗教生活の原初形態』に至って「聖なるもの」という呼称で登場し、「俗なるもの」との対置の中で、その独特の意味世界が詳細に論じられることになる。また、〈超越的なもの〉を把握する科学的認識上の技法としてデュルケムが自然科学的実証主義を一貫して用い続けたことは周知の通りであるが、『社会学的方法の規準』は同時に、〈超越的なもの〉としての「社会的事実」を研究する実証主義社会学の樹立を宣言する書でもあった。『自殺論』において、近代産業社会の勃興により生じた社会変動により〈超越的なもの〉が社会的リアリティを失って出現する社会的状態が「アノミー」と命名され、その社会的・精神的危機のありようが深い危機感と共に論じられたことは、よく知られている通りである。

ところが、デュルケムが、断片的な論及をあちこちに残しながらも包括的な理論構築に着手しなかった領域がある。それこそが、「〈超越的なもの〉は如何にして「集合生活」から生成するのか」という問題圏である。私見では、この問題圏での能う限り精緻な理論化を明示的に行わなかったことこそが、デュルケムの所説をめぐって数々の混乱や誤解が発生した最大の原因である。確かにデュルケムは、〈超越的なもの〉それ自体については、前述の通

り「集合意識」や「社会的事実」そして「道德的事実」さらに「聖なるもの」といった用語を繰り返して詳論している。〈超越的なもの〉と個々の人間との関係についても、よく知られている通り、「外在性」「拘束性」といった“外的”指標や「権威」「愛着」といった内面的な道德の心性を捉えて、道德的規範の精神的拘束力による社会統合のあり方とその機能について詳論を試みている。ところが、『集合生活それ自身が産み出す』という、「道德」現象の発生論的な位相については、「道德」現象の他の諸位相に関する考察や分析の蓄積および水準に比較して、社会学的検討という点において圧倒的に劣ることは否めない。確かに、『宗教生活の原初形態』の中に「集合的沸騰」現象に関する熱のこもった叙述があり、デュルケムがこの問題領域を閑却していたわけでないことは疑いない。また、よく知られているように、この「集合的沸騰」論に至るまでにも、〈超越的なもの〉の生成に関する言及を実はほぼ全ての著作と多くの論考に、しかも数多く残している。しかし、自然科学分野（生物学・生理学・心理学）への依存ゆえに抱え込んでしまった文字通り致命的な理論的難点にも災いされて、この問題領域における理論構築作業は、固有の意味で社会学的にはほとんど行われていないと言ってよい。

このことの背後には確かに、所与のものとして眼前に与えられている社会的現実の観察と分析に専念する認識のあり方を超え出ないことが実証主義的認識の本旨である以上、未確定あるいはさらに未生成の社会的現実を認識対象とすることが困難さらには不可能であったという事情もある。しかし、「集合的沸騰」現象の意義を評価した『原初形態』において、ほとんど宗教心理学の領域にまで認識領域を広げ得たからには、また没後に編集・出版された『道德教育』において道德心理学ともいべき分析をなし得ていたからには、幻の大著『道德』においてはそれらを承けて、より総括的な次元において、〈超越的なもの〉の生成を解明する理論構築に取り組んで然るべきであったと、筆者は考えるものである。

(2) 実証主義社会学の社会思想的課題

さらにまた第3に、実証主義社会学の基本的性格に照らしても、「〈超越的なもの〉は如何にして生成するのか」という理論的課題に取り組むべき理由があった。このことは上掲の問題群のひとつ、「そうした危機的事態を収束させるためにいかなる手段を講じるべきなのか」という実践的な問題圏に関わる。実際たとえば、『原初形態』におけるデュルケムの主要関心は、民俗学的・社会（文化）人類学的な記述的宗教研究にあったわけではない。むしろ、相対的に単純な構造を持つ社会を素材とすることを便宜として、あらゆる「集合生活」に普遍的に内在し、「集合生活」をそれとして存立せしめる原型的な機序——デュルケム版「事物の本性」——を解明し抽出することが目標であった。すなわちデュルケムは、〈超越的なもの〉の原型としての「聖なるもの」をめぐる営まれる「道徳」生活の現象機序を解明することを目指したのであり²⁾、危機的混迷を深めつつあると彼の目に映じた近代産業社会を安定化させるために再建すべき「社会」の規範的理念像として、それを明瞭に提起する——「集合生活」に還れ!!——ことが目標であった。他方、『道徳教育』にはデュルケムの講義が収められているが、そこで彼が目指したのは、〈超越的なもの〉に対応する精神的要素として「道徳性」を習俗の次元から抽出し、それらを合理化・世俗化することによって、一層の世俗化が進行しつつある近代社会をひとつの全体社会として統合し得る何らかの〈超越的なもの〉³⁾の心的基盤を指示することであった⁴⁾。政治体制的には比較的安定していたとされる第三共和制の時代を生きていたとはいえ、右へ左へと大きな振幅を描きながら“成長”を続ける19世紀後半の近代フランス産業社会とそのイデオロギー的状况——デュルケムの仇敵「功利主義的个人主義」の蔓延——は、「集合生活」主義者デュルケムの目には「アノミー」、すなわち危機的な道徳的混乱状況と映じていた。周知の通り、実証主義社会学者デュルケムの学的関心は、ドレフュス事件への積極的関与にも見られるように、

同時代の社会的状況に対する実践的関心と深いところで繋がっているものとしてあり、社会学を一学問として樹立するという学問的情熱と、かつての安定性を失ったフランス社会の道徳的再建という社会思想的課題は、ひとつながりのものであった。デュルケムの理論的・実践的関心は終生一貫して、産業革命とフランス革命を経たフランス近代社会の歴史的進展を復古的に逆戻りさせることは不可能だという認識に立ったうえで、しかしその近代化の過程で破壊・喪失した伝統的な「集合生活」およびそれに由来する社会規範の社会統合力を、近代社会に相応しい形で恢復することにあった。歴史的蓄積を持つ「集合生活」の規範的統合力を、自らが創造しようとしている「社会学」の認識成果と実践的関与によって恢復するという、この社会思想的テーマを担い追求したのが、デュルケム実証主義社会学であったのである⁵⁾。

しかし、実際にデュルケムが明示的にとった行動は、「集合表象」となるべき観念的な「記号」を示しただけであった⁶⁾。これは、社会学ないし社会学者の社会的介入における一つの実践的なあり方ではあり得ても、社会学の学的本態に基礎づけられた実践的介入を構成するものとしては不十分である。「道徳」現象が現実存在する社会を規範的な事例やモデルとして示すことも、社会統合にとって「道徳」が必要不可欠であることを力説することも、「道徳」が消失した際の社会的・人間的状況を「アノミー」と命名して規範主義的に批判することも、上述のような実証主義社会学の社会思想的ミッションを、せいぜい間接的に果たすものでしかない。実証主義社会学の科学としてのミッションから言えばそれで十分なのかもしれないが、実証主義社会学の社会思想的ミッションとしては、不十分なのである。むしろ、現実の社会的事象として「道徳」現象の生成の有様がまさしく客観的に解明され、デュルケム社会学の理論構成の内部に正しく位置づけられているのでなければならぬ⁷⁾。そしてそれこそが、現実社会にむけて提示されるのでなければならない。「社会の

道德的再建」は、新たな「道德」を「集団」「集合生活」それ自体が生み出すことによって成し遂げられねばならないからであり、いかにしてそれが可能であるかを示すのが、デュルケム道德社会学の重要な社会思想的任務であったはずだからである。

先の問題群に加えて、「〈超越的なもの〉はいかにして生成するのか」という問題が、道德社会学における理論的整備という意味でも、実証主義社会学の社会思想的性格と自負を具体化するためにも、問われなければならない、答えられなければならない所以である。実証主義社会学者デュルケムにとっては、理論と実践といった陳腐な二分法に立ち、社会学的認識に基づいて社会的現実への実践的介入に乗り出す（この場合往々にして、理論の現実化は理論それ自体の持つ合理的説得力や現実形成力とは異なる社会的影響力に依存することとなる）のではなく、社会学研究それ自体が社会的現実と切り結ぶものでなければならなかったはずである。独特のありかたで科学的認識と実践の行為が地続きであることが、フランス実証主義の伝統的特質であるはずだからである。そうした意味での実証主義の立場に立つデュルケムが、生涯にわたる研究活動を総括するはずの全三巻の著作を構想するからには、眼前に十全な形で存在しないものについては語らないという狭義の実証主義の枠を超え、《集合生活それ自身が産み出す》という位相を解明する社会思想的な理論的領域をそこに加えないなどということは、決して許されないはずなのである。この「道德」現象の生成を解明する作業は、アノミーなる社会的現実——「道德」の社会的解体状態——を前にした場合、「眼前に存在しないもの」を対象とすることとなり、社会思想的課題とならざるを得ないからである。

3. 社会思想としてのデュルケム道德社会学

本稿は、何らか〈超越的なもの〉の産出活動を通じた社会統合を目指す社会思想としてデュルケム社会学を理解することを目指す一連の研究の、その

イントロダクションである⁸⁾。本稿以降、一連の論文を発表する予定であるが、その一貫したテーマは、上に述べたように、実証主義社会学を一独立科学として樹立するというデュルケムの学的課題と不可分のものとしてある、「近代産業社会の道德的再建」を目指すという社会思想的課題へのチャレンジとして、その学説を検討し、「道德」の発生論的機序を中心に据えてこれを再構成することである。すなわち、「道德」現象の生成を捉えた理論構成を、「道德」現象の〈発生論的構成〉と名づけ、デュルケム自身のテクストの中に探索し、可能な限りの内在的かつ批判的構成を試みるものである。

「道德」現象の発生プロセスを明らかにすることは、デュルケムが多用した「事物」という言葉を使えば、道德的諸事実という一種独特の「事物 chose」が、《物化 chosification》とも言うべき生成過程に不断に支えられており、その限りで「事物」であり得ているという事態を明らかにすることに他ならない。この「事物」性の現象過程に内在するメカニズムあるいはプロセスを社会学的認識として獲得することができたとき初めて、「道德」現象の持つ超越的性格と経験的現実性を破壊することなく、それらを科学的に解明しようというデュルケムの意図は十全に達成されるはずである。そして同時に、デュルケム本人が（楽観的にはあるが）切望していたように、「道德」現象を神秘化する「物神崇拜 fétichisme」への転落を回避することが可能となり、新たな集合的「道德」を生成する集団的な実践的行為へ向けた展望を拓くこととなろう。

もとより、デュルケム社会学に対して客観的評価を決しようとするに際しては、デュルケム社会学の理論的核心に対する内在的かつ的確な理解と、そこに視座を据えて理論の全体像が展望されたうえでなければならない。しかし、デュルケム道德社会学に対する十全な内在的理解を可能とするほどには、既に十分に蓄積され成熟した研究成果があるとはいえないと、筆者は考えている。実際、例えばデュルケム研究における碩学の指摘——小関藤一郎「デュ

ルケム研究の見過ごされた領域—道德研究について」（1993）および「デュルケムの道德研究 社会学的研究と哲学の問題」（1994）——は、デュルケム社会学研究に、この2論文の発表当時「道德」研究が少なくともおほとんど未開拓の領域として残されていることを明らかにしたが、その後の研究の蓄積を通じて、この領域の研究がその後デュルケム研究における他のテーマ群と並ぶだけの蓄積を獲得しているとは思えない。私見では、デュルケム社会学は、少なくとも日本社会学においてはあまりにも近代主義的な理解がなされすぎてしまっており、その重要な理論的問題領域が軽視され続けてきている⁹⁾。

繰り返しになるが、デュルケム社会学の根本的性格は、それを全体として社会思想的な性格の濃い道德社会学と表現することができる点にある。デュルケムによる社会学建設の学的営為は、その核心において、社会思想的問題意識に基づく道德社会学の構築と特徴づけることのできるものである。それは、歴史的・文化的堆積物としての「習俗」に照準した、独特の道德論がその中核にあるからである。デュルケム社会学におけるこのほとんど未開拓の領域は、ただほとんど未開拓であるがゆえのみならず、それこそが実にデュルケム社会学の理論的核心を成しているがゆえにこそ、なお徹底的な内在的研究に値するものなのであり、この観点から為されるデュルケム社会学の徹底的解明を踏まえずして、デュルケム社会学に対するおよそいかなる全体的評価も無意味と言うべきであろう。

ところが、デュルケムの道德社会学、なかでも道德社会学における〈発生論的構成〉は、社会的連帯論、社会学論、社会学的認識の方法論、自殺研究、宗教社会学研究等々といった華々しい主要諸研究分野の影に隠れてほとんど素通りされてきており、専らデュルケム社会学研究に従事する研究者間においても、せいぜい周縁的位置付けを与えられるに過ぎない分野であり続けてきた。「道德」という言葉の持つ前近代的で権威主義的なイメージが、近代社会の構築原理である「自由」「個人」といった理念と矛

盾するものと感じられ、時代錯誤と受け取られているのかもしれない。いずれにせよ、デュルケム社会学が道德社会学を核に持ち、したがって全体として道德社会学という性格を強く帯びていることを最大の特徴としているという事実と、デュルケム社会学研究における道德論の周縁的位置付けとの間に巨大なギャップが存在していることは、依然として真実である。

そうした研究状況を産み出した最も大きな理由は、デュルケム自身が提示した『社会分業論』における進化論的な社会発展論ではないかと思われる。一般に、この著作では「環節的社会」から「組織的社会」へ、「機械的連帯」から「有機的連帯」へと、社会形態とその編成原理が進化論的に移行することが記されていると理解されている。確かにその通りである。この進化論的な社会と連帯の形式の変遷に沿って「集合意識」は消滅するのだ、とも記されている。これもまたその通りである。そうして、近代社会の分業を通じた機能的連関が社会の全面を覆っていくというストーリーが描かれている、と。これもまたその通りである。しかし同時にこの著作は、「環節的社会」「機械的連帯」「集合意識」の歴史の変容にも言及しているのである。ここでは詳論することはできないが、この著作は、「環節的社会」と「組織的社会」、「機械的連帯」と「有機的連帯」の同時併存を、その後半以降の叙述の中で問題化してもいるのである。「集合意識」は消失しないのだ。実際、その延長上に、周知の「道德的個人主義」の思想が提起されることとなるわけであるし、やがて『宗教生活の原初形態』も書かれるわけなのである。

筆者は、デュルケム道德社会学において中核的位置を占める学的洞察のうちに、社会学的理論構成の中心軸、従ってデュルケムの社会思想家としての営為の中心軸に「道德」の〈発生論的構成〉がある（べき）ものとする立場から、その理論構成をデュルケム自身のテキストに即し、「集団」「集合生活」に視点を据えて、社会思想としてのデュルケム道德社会学はかくなる姿であったらうと思われるも

のを、構成してみたいと考えている。

【註】

- 1) 周知の通り、「背後仮説 background assumption」論は、A・グールドナーが社会学に遺した偉大な知的遺産である。社会科学や社会思想・社会哲学は、神なき時代としての西欧近代社会において、神と聖書に代わる集合的自己認識の営みであるが、そうした人間社会の自己認識の営みそれ自体に対する反省的・批判的検討は、社会科学を構成するいずれの学問分野においても、各々の学問の基礎付け作業の重要な一部を構成している。社会的世界に対する批判的認識の蓄積を目指す社会学にとっても、社会学的認識の営みそれ自体が批判的検討の対象となるのは明らかである。知識社会学を中心に、神に非ざる人間の、その認識作用の社会的被規定性を最も強く意識し続けているのが、社会学であるからに他ならない。

デュルケムが「道德」について自己言及的な検討を行わなかったのは、まだ「道德」の社会的な存在可能性を信じることができるような客観的な状況があると、デュルケムの眼には見えていたからかもしれない。その意味で、イデオロギー的な背後仮説というよりは、アノミー現象を前にしつつも、ニヒリズム的な「道德」の“底抜け”現象は社会的なレベルで懸念する必要はないという時代感覚があったからかもしれない。

- 2) デュルケム社会学理論においては、我々の生活感覚あるいは社会学における通念とも異なり、「宗教」よりも「道德」の方がより包括的な概念である。このことは、デュルケム社会学に対する的確な理解のために、どんなに強調してもし過ぎることはないように思われる。デュルケムの理解では、「宗教」現象は、人間が集合的に営む社会生活における「道德」現象の典型であり原型でもあるが、「道德」現象のすべてではない。デュルケムは、「宗教」の世俗的・社会学的理解を通じて「道德」現象の原型を把握し、その認識成果を現実の世俗化社会の道德的統合に役立てようと企図していたからである。

なお、デュルケム社会学における「道德」現象については、社会思想史的文脈に乗せて言えば、

ドイツ観念論における「精神」や、フォイエルバッハが『キリスト教の精神』(1841)で展開した議論との比較検討を通じて、新たな知見が得られるかもしれない。デュルケム道德論には道德が現象するための主要な契機としてルソーの「譲渡 alienation」が流れ込んでいるからである。周知のとおり、Alienationは「譲渡」であり「疎外」であり、ヨーロッパ近代社会思想を形作った最重要の概念である。もとよりドイツ観念論とデュルケムの「道德」の異同を論じる機会ではないのでここではこれ以上言及しないが、デュルケムの「道德」が人間の社会的・文化的全体を捉えようとするスケールの大きさを持つものであることは指摘しておかねばならないと思う。

- 3) よく知られているように、近代社会において聖なる「集合表象」となるべきものとしてデュルケムが予言的に提起したものが、「道德的個人主義 l'individualisme moral」[1911:79/1985:84]であった。この思想はフランス新カント主義の元祖といわれるシャルル・ルヌヴィエに由来するとされている。筆者は、当時の社会的現実の中でこの言葉がいかなるリアリティを、またどの程度持っていたのかが問い直されねばならないと思う。どれほど高邁かつ有意義であれ、「道德的個人主義」なる思想がルヌヴィエの提唱になる哲学的思想であって「集団」「集合生活」に由来する社会的現実でないとすれば、それは実証主義的認識の原則に反するはずだからである。なお、「集合意識」の歴史的変遷というテーマは『社会分業論』の後半で展開されている。
- 4) 『宗教生活の原初形態』の「結論」章は、社会思想的観点から見た場合、〈超越的なもの〉をめぐりデュルケムの研究活動にとつての総括と見なすことはできない。デュルケムはこの「結論」章で早くも、カントの「カテゴリー」論を自身の「集合表象」論に引き取る形で、認識社会学ないし知識社会学の創出を試みているわけだが、〈超越的なもの〉の一形態とデュルケムが見ている「カテゴリー」は、確かに人間知性を拘束する思考の枠組みとして直接の経験を超越しているものの、それは聖性という道德的特質を伴わないからである。真の“結論”は、この全3巻におよぶ大

著となって結実するはずであったし、そうでなければならなかった。そこには、デュルケムが言う「道德」とは結局のところ何なのかという根本問題をめぐって綿密な考察が試みられ、デュルケムの「道德」論が原型的な姿で構築される機会となっていたはずなのである。また、実際デュルケムはそうすべきであった。

- 5) この次元においては、デュルケムの社会学的問題関心は終生一貫していたと考えられることから、前期・中期・後期などといった時期区分は、したがってまったく不要である。もちろん、「外から内へ」という認識の段階的深化を唱えて自ら実践したデュルケムの認識の進化に即して段階ないし時期を画することはもちろん可能だが、筆者は試みない。
- 6) デュルケムは、「道德的事実の決定」(1906)において社会学の教導的役割に言及しており[1906:79-82/1985:85-88]、それはある意味で社会的現実への介入と言えるものだが、本稿で〈超越的なもの〉と表現しているものの生成それ自体への関与に論及するものではない。むしろそれは、実証主義社会学の機能的な役割遂行という次元での言及である。というのも、デュルケムは「集合生活」のある種の盲目性といったものを想定しているからである。つまり、「集合生活」それ自体は何を〈超越的なもの〉とするか、自ら決定する力を持たないと見ているのである。「集合生活」は自らを適切に表象することに失敗する可能性があるというわけである。そこで、実証主義社会学が「集合生活」に対して何を〈超越的なもの〉として聖化するかを教えることが必要となる場合がある、と見ているわけである。これは、啓蒙的というよりは、船舶の舵取りの関与と言えるのではないか。デュルケムは、科学の権威と、科学に対する人々の心服によってそれは可能だと考えているが、科学の権威も自明でない以上、こうした介入が当該の「集合生活」によって拒否されることは、もちろん十分にあり得ることである。
- 7) デュルケムの眼には、「道德」現象の発生は人間の集団生活と不可分であり、およそ人間が集団生活を営む限りにおいて消失するなどということはあり得ないと映じていたであろう。端的に言え

ば、「道德」は「集合生活」という現象における「事物の本性」だと、デュルケムは見なしていたからである。したがってそれをあえて問題化する必要性を感じなかったものと思われる。「道德」の消失をデュルケム自身が「アノミー」と呼んで危機視していたことは周知の通りであるが、デュルケム自身は「アノミー」を歴史的な過渡的現象ないし一時的な病理的逸脱現象——「道德」の社会的失念状態——と捉えていたのであり、“正常”な状態に復帰せしめれば事態の収拾は図れると考えていたものと思われる。このあたりに、デュルケムの社会・歴史認識における独特の楽観的傾向が看取れる。

方法論的観点からも、この問題に言及しておこう。デュルケムの社会学的認識の手法は、よく知られているように、認識対象と認識主体である社会学的観察者を方法的に切り離すことに始まる。そしていくつかの方法的規準に則りながら、彼の社会学的認識が最終的に目指すのは、認識対象である社会的世界と認識の成果として構築される理論的説明の体系との間に、最大限の合理的な符合が成立することであった。方法論上の客観主義と存在論的な客観主義を一応区別した上で、両者の合致が目指されているのである（これがデュルケム実証主義の真理観である）。したがって、社会学的認識の妥当性は、当然この合致の程度によって測られることとなる。社会的世界の変動と人間行為に関する法則的認識を獲得し、社会的世界の将来を予測してみせることも、両者の合致を証明するものと考えられた。社会的世界に対する実践的な関与ないし介入は、当然、この将来に対する予測に基づき、その未来像を実現することを目指して行われる。註3)で触れた「道德的個人主義」に関わる“予言”がその実例である。

では、認識対象として所与と見なされ、社会学的認識の存在論的对象としてそこに存在する社会的事実＝社会的制度群は、どのようにしてそこにそのようにして存在しているのか。本研究が取り組もうとする課題は、端的にこの存在論的問題に応えることである。すなわち、認識主体を離れて存在論的に自存するとされたこの認識対象、すなわち方法論的にも存在論的にも所与とされた社会

的制度群は、いかにして、なぜ、そこにそのようにして存在しているのか。この問題をデュルケムはどう考えていたのか。直裁に言えば、社会的制度群の存在と生成のありようを解明すること、しかもその際、デュルケム社会学に徹底的に内在してこの問いに答えること、これがデュルケム社会学研究の最重要課題であると筆者は考える。デュルケムの道徳社会学の意義は、まさにこの問題に対するデュルケム自身の回答を突き止めることができる点にある。デュルケムの道徳論は、社会的制度群がどこから、そしてどのようにして発生してくるのかをめぐる考察を含んでいる。つまり、デュルケムの道徳論は、社会的制度群の生成の過程を解き明かす、実証主義社会学が持つ存在論的認識のありようを含んでいるものなのである。従来、デュルケムは機能主義の元祖とみなされてきており、実際その通りである。しかし同時に、デュルケムは社会学における存在論的認識の開拓者でもあるのである。

- 8) 筆者はデュルケムを、実証主義社会学の創始者としてと同時に、ある局面ではそれ以上に、社会思想家として理解すべきと考えているものである。デュルケムの課題は、観念的思弁を超えて実証的な社会認識の方法としての社会学を樹立することと、対立や葛藤を孕んで不安定な状態であり続けている近代フランス社会に安定的な統合をもたらすことであった。もちろん、後者がデュルケム社会学の実践的な社会思想的課題である。デュルケムはこの二つの課題を、まさに統合的に達成しようとした。それが、「道徳の科学」の構想である。その意味で、最晩年に構想していたものだけが「道徳の科学」なのではなく、デュルケム社会学全体が実践的志向性を持つ「道徳の科学」なのである。デュルケムのこの実践的・思想的課題への臨み方を重視する観点から、デュルケムをむしろ社会思想家としてとらえるべきものとするわけである。実際、眼前のフランス社会は動揺が続いているわけだが、その状態を社会的統合の解体状態——アノミー——と把握することには、デュルケムの社会統合に関する価値関心が背後仮説として作用している。「道徳的個人主義」は理念ではあっても社会的現実ではない。実証科学は未来予

測をも志向するし許容するから、そうした観点から「道徳的個人主義」について語ることは許されるかもしれない。しかし、なおそれは“現実”ではないし、「道徳的個人主義」が近代社会における唯一の「集合意識」となるはずだ」という予想を語ることに「そうなるべきだ」という規範的メッセージが込められている以上、それは規範的理念として語られているものと見なす他ない。

そして筆者は、デュルケムのそうした規範主義的社会思想家の側面を、デュルケム社会学をよりよく理解するうえで大いに役立つという意味において、むしろ積極的に評価すべきではないかと考えるものである。そして実際に、社会思想家としての学的活動として、社会学建設の営為を位置付けるべきではないかと思うのである。なおその際、既存の「道徳」を語り分析する活動は、未来の「道徳」を創造する（しなければならない）「集合生活」との“一種独特の”社会思想的共同作業として行われねばならないのではないかと、筆者は考えるものである。「集合生活」から〈超越的なもの〉が産出される機序が徹底的に解明されるべき所以である。

- 9) デュルケムは自身の社会学を、上述の通り「習俗の社会学」と呼んでいる。デュルケムは、近代合理主義の人格化としての「個人」を出発点に、そうした「個人」の随意的な関係構築が積分されたものとして、つまり社会契約論的に現実の「社会」を捉えることはしない。デュルケムはそうした「個人」を経験的存在としては認めないし、社会契約論が指定する「自然状態」は歴史的事実ではないとしてこれを退けている。デュルケムが自らの社会認識を構築していく上での思想史的基盤として、ルソーではなくモンテスキューを選んだ所以である。デュルケムの中心的関心対象は、人間の経験の集合的および歴史的な集積の産物である「習俗」の次元にこそあり、社会思想的課題はそれを合理化・近代化することであった。したがって、例えば「個人と社会」という近代主義的問題構成に囚われている限り、デュルケム社会学の理論構造を正しく読み解くことはできない。「人権」思想が歴史的・社会的産物であるのとまったく同様に、「個人」もまた歴史的・社会的産物で

ある。デュルケム社会学は、そうした「個人」が「習俗」から生まれるプロセスを問題化するものなのである。

【引用・参考文献】

引用箇所は、[原著出版年：原著頁／訳書出版年：訳書頁]で示す。

〈デュルケムの論著〉

1893, *De la division du travail social: Etude sur l'organisation des sociétés supérieures*, 2e éd. 《Quadrige》, 1991, PUF.

◆1971, 田原音和訳『社会分業論』, 青木書店.

1895, *Les Règles de la méthode sociologique*, 19e éd, 1977, PUF.

◆1978, 宮島喬訳『社会学的方法の規準』岩波書店

1897, *Le suicide: Étude de sociologie*, Nouvelle éd 1979, PUF.

◆1985, 宮島喬訳『自殺論』, 中央公論社.

1898, *L'individualisme et les intellectuels*, [La Science sociale et l'action, pp.261-278]

◆1988, 「個人主義と知識人」『社会科学と行動』第10章, 207-220頁.

◆1983, 「個人主義と知識人」『デュルケム宗教社会学論集』, 35-53頁.

1898, *Représentations individuelles et représentations collectives*, [Sociologie et Philosophie, pp.1-38]

◆1985, 「個人表象と集合表象」『社会学と哲学』第I章, 11-52頁.

1906, *Détermination du fait moral*, [Sociologie et Philosophie, pp.39-71]

◆1985, 「道德的事実の決定」『社会学と哲学』第II章, 53-89頁.

1911, *Jugements de valeur et jugements de réalité*, [Sociologie et Philosophie, pp.90-109]

◆1985, 「価値判断と現実判断」『社会学と哲学』第四章, 111-133頁.

1912, *Les Formes élémentaires de la vie religieuse: le système totemique Australie*, 2e éd. 《Quadrige》, 1990, PUF.

◆1975, 古野清人訳『宗教生活の原初形態』(上)・(下), 岩波書店.

1914, *Le dualisme de la nature humaine et ses conditions sociales*, [La Science sociale et l'action, pp.314-332]

◆1983, 「人間性の二元性とその社会的条件」『デュルケム宗教社会学論集』, 249-268頁.

◆1988, 「人間性の二元性とその社会的条件」『社会科学と行動』第15章, 250-263頁.

1917, *Introduction à la morale*, [Textes2, pp.313-331]

〈関連論文・文献〉

小関藤一郎「デュルケム研究の見過ごされた領域－道德研究について」『関西学院大学社会学部紀要』第67号 pp.13-24, 1993

小関藤一郎「デュルケムの道德研究 社会学的研究と哲学の問題」『関西学院大学社会学部紀要』第60号 pp.3-17, 1994

江頭大蔵「デュルケムにおける発生論的アプローチの展開－機能概念に関する研究ノート」『哲学年報』47, 37-51頁, 1988

大野道邦「構造デュルケムか文化デュルケムか：デュルケム社会学の理論的問題」『奈良女子大学社会学論集』第21号 pp.1-17, 2014

厚東洋輔「デュルケムと「道德の実証科学」：社会的なものの興亡（その4）」『関西学院大学社会学部紀要』115, pp.65-85, 2012

太田健児「デュルケムにおけるライクな道德の意味——神なき時代のモラルサイエンス問題」『尚綱学院大学研究報告』50, pp.57-69, 2003

Avin W. Gouldner “The Coming Crisis of Western Sociology” Basic Books Inc., New York (1970) アーヴィン W・グールドナー『社会学の再生を求めて』岡田直之, 田中義久他訳(新曜社) 1978

Wallwork.E, “Durkheim: Morality and Milieu” Harvard University Press 1972

W.Watts Miller, “Durkheim, morals and modernity” McGill-Queen’s University Press 1996

Émile Boutroux “De la contingence des lois de la nature” Paris, Alcan, 1898

Revisualizing Durkheim's Sociology as Social Thought : The objective of Durkheim's sociology of morality

KAGEI Mitsuru ⁱ

Abstract : I report in this paper, for the first time, about my plan to revisualize Durkheim's sociology of morality as social thought. Durkheim's sociology sought to achieve two difficult objectives simultaneously; to establish sociology as a new independent science, and to respond to the demands of the time by overcoming secularly and rationally the unstable social condition of 19th century France, through carrying out a "moral reconstruction of society." Then, it was "sociology of morality" and the tome "la morale," which ended in illusion, that were supposed to play the role of meeting these two challenges. In this paper I begin to re-construct Durkheim's "sociology of morality," explaining that it is <genetic theory> of "social facts" that contributes greatly to theoretical development of Durkheim's positivist sociology and provides us with a viewpoint from which we can see "social facts" multi-dimensionally, and at the same time, responds to the demands of the era by fulfilling the mission of positivist sociology as social thought.

Keywords : moral, introduction to morality, science of morality, collective life, social thought, positivistic sociology

ⁱ Associate Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University